

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 9 月 16 日現在

機関番号：32685

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26882042

研究課題名(和文) 体育教師の身体の実存的意味に関する現象学的研究

研究課題名(英文) The existential phenomenology of the PE teacher's lived body

## 研究代表者

坂本 拓弥 (SAKAMOTO, Takuya)

明星大学・教育学部・助教

研究者番号：30734298

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、体育教師を現象学的身体論の視点から捉え、彼らの身体が担っている実存的意味を明示することであった。従来論じられることのなかったその実存的意味を開示することは、技術的方法論が先行する今日の体育教師論に対して、現実に児童・生徒とともに生きる体育教師の身体という、新たな研究対象の可能性を示すことになる。体育教師の身体は、世界内存在として体育授業という世界に在る。その身体の働きは、体育授業に住まい、さらには児童・生徒とともにその世界を変容していこうとする、視線の動きや「怒り」の表現等の実存的な身体的行為として現れる。それらの行為によって、体育教師は自らの実存を安定させているのである。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to elucidate the significance of the existential phenomenology of the PE teacher's lived body. It shows that the lived body could be a new research subject which has been omitted in the field of the PE teacher theory. The PE teacher's lived body, as a being-in-the-world, is in a world of PE class and tries to dwell into the world through her existential bodily actions such as eye movements or expressions of "anger". These actions enables her to enhance and realize the meaning of her existence.

研究分野：体育・スポーツ哲学

キーワード：教師 体育 身体 実存 授業 現象学 指導言語 怒り

## 1. 研究開始当初の背景

体育教師の身体という対象は、体育学の研究史において学術的な議論が蓄積されてきたとは必ずしも言えない。その背景には、体育は「児童・生徒の身体」を教育する営みであるという事実がある。そのため、体育・スポーツ哲学をはじめとする人文系の先行研究は、必然的に児童・生徒の身体を対象としてきたのである。このことは、現代の体育哲学における身体論の代表的な諸研究にも一様に示されている。例えば、佐藤臣彦(1993)『身体教育を哲学する』や瀧澤文雄(1995)『身体の論理』、また樋口聡(2005)『身体教育の思想』等は、いずれも優れた哲学的な身体論研究ではあるが、それらの中に体育教師の身体への言及を見ることはできない。この傾向は、海外の体育・スポーツ教育に関する研究についても同様である。

しかし、本研究の主題となる体育教師の身体的重要性は、実際は児童・生徒の身体的重要性を示す多くの研究から逆説的に導かれてくる。特に、哲学や社会学が扱う人間の身体を対象とした場合、児童・生徒と日常的にかかわり続けている教師の身体が、教育的関係の中で影響を持たないことはまず考えられないであろう。つまり、教師の「身体を問題にする」ということは、つねに関係の在り方を問題にすること(齋藤孝(1997)『教師=身体という技術』p.7)なのである。そして、そのような他者との関係における身体の役割を検討可能とする1つの立場が、メルロ=ポンティに代表される現象学的身体論である。体育(身体教育)が教師と児童・生徒との関係から成り立っている以上、体育授業においては児童・生徒の身体と同様に体育教師の身体もまた重要な役割を担っているはずである。それゆえ、体育教師の身体の在り方の解明は、1つの重要な研究主題になると考えられる。

以上のような問題意識に基づき、申請者はこれまでに本主題に関する研究を進め、それらを3本の原著論文として発表してきた。すなわち、実証主義的方法論に偏っている今日の体育教師論の批判的検討を通して、現象学的な視点から体育教師の身体を論ずる必要性を提示したものの、体育教師の身体を論じるための視座として、メルロ=ポンティを中心とする現象学的身体論が有効であることを示したものの、及びその現象学的身体論の視点から、体育教師らしさを身体文化として獲得する過程を明らかにしたものの、の3本である。本研究は主にこれらを土台とし、そこに後述する実存的な視点を加えることによって、体育教師が身体として児童・生徒の前に存在する意味を探究するものである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、体育教師という存在者を現象学的身体論の視点から捉え、彼らの身体が担っている実存的意味を明示することで

ある。この実存的意味とは、個々の体育教師が自身の存在意義を無自覚的に獲得(実感)することを指している。「体育教師は現実の授業でどのようにして自らの存在意義を確保している(しうる)のか」という根源的かつ切実な問いに答えることが、本研究の最終的なねらいである。この課題を検討するために、本研究では現象学的身体論における実存的な観点に着目して考察を進めた。従来論じられることなかった体育教師の身体について、その実存的意味を開示することは、ICTに代表される技術的方法論が先行する今日の体育教師論に対して、現実に児童・生徒とともに生きる体育教師の身体という新たな研究対象の可能性を示すとともに、「教員養成における身体教育」の必要性を提示することにもなると考えられる。

上記の論文で粗描したように、体育教師の身体論は、全体像として身体文化論や言語論、さらには空間論等を含み、最終的には身体的存在としての体育教師に関する総合的な理論として構想されている。これは、後述するように、メルロ=ポンティ哲学を中心に議論を展開することで得られる、体育教師の身体論の全体的な展望となっている。この全体的な構想の中で、本研究は特に体育教師の身体の実存的な在り方を検討し、その意味を明らかにする。

本研究が特に焦点化して検討する課題は、次の2点である。すなわち、個々の体育教師は彼ら自身の実存的意味(存在意義)を無自覚的にどのようにして獲得しているのか、また、それが実存的な身体的行為を通してなされるならば、その実存的な身体及び身体的行為はどのような在り方をしているのか、という2つの点である。そして、これらの問いの答えを探究することは、結果的に「私は何のためにここにいるのか」という個々の体育教師の実存を揺るがす根源的問いに1つの答えを提示することになるであろう。この問いは、多くの論者が指摘するように、学校現場に生きる多くの教師に突き付けられている、現実的かつ深刻な問いである(例えば、van Manen1990 ; Faber1991 ; Pines2002 ; Tomic&Tomic2008等)。

従って、以上の2つの点について、本研究では以下の事柄に絞って検討した。まず、実存的意味の無自覚的な獲得については、それが無自覚的であるという点に注目し、暗黙知に関わる身体領域の可能性を示す。これによって、従来の心理学的・社会的なアイデンティティ論とは異なる、実存的意味を担う身体の可能性を提示する。その上で、その身体がどのようにして実存的な意味の獲得を可能としているのかを明らかにする。その際、ハイデガーらに端を発する、現象学的論考における実存的な議論を参照し、われわれの具体的な行為の分析を通して、体育教師の実存的な身体の在り方を明示する。

### 3. 研究の方法

初年度は、これまでに検討してきた現象学的身体論について、改めて実存的な論点に着目することによって、身体に関する実存的な理解を見出すことを目的とした。これは、体育教師の身体の実存的意味を明らかにするための、予備的な考察である。具体的には、まず、メルロ＝ポンティの『知覚の現象学』における「怒り」に関する記述に着目し、身体的現象の実存的な特徴を検討する。これらの検討を通して、一般的に心理的なものと考えられている現象を、人間の実存に関わる身体的な現象として捉えることが可能になると考える。また、例えば「怒り」については、従来感情の制御不能となった状態として理解され、それに対してアンガー・コントロールといった理性による感情の支配の問題が論じられてきた。しかし、今日の身体に関する現象学的な議論（Gallagher and Zahavi 2008）や最新の認知科学的な知見（Gibbs 2005）が示唆するように、それらはむしろ身体的な行為として理解されるべきものである。従って、これらの議論を併せて検討することによって、一般的には人間の心的・内的過程の表出と考えられている「怒り」や「赤面」といった現象が、実際には人間の実存的な在り方に深く根付いた身体的現象であることを示していった。

ハイデガーの後期哲学における身体に関する言及は、実存在的な視点を多く含んでおり、従って本研究の課題の探求に重要な示唆を与えたと考えられた。特に、彼と精神医学の研究者との対話の記録である『ツオリコーン・ゼミナル』は、人間の身体の実存的な意味に関する重要な議論である。従って、本研究ではこの『ツオリコーン・ゼミナル』を中心に検討を進めた。もちろん、彼の哲学全体が存在論的な意義を有することを鑑みても、本研究の主題である体育教師の実存的意味（存在意義）に対して、そこから有益な論点と視座を得ることができるであろう。

最終的には、このハイデガーを中心とする議論と申請者がこれまで検討してきたメルロ＝ポンティの身体論との整合性、及びそこにおける身体についての実存的な理解の意義を探った。これによって、次年度に検討する体育教師の実存的な身体についての理論的な基盤が確保された。また、ハイデガーとメルロ＝ポンティ両者における身体論の関係については、これに関する数少ない研究である Aho (2009) の議論も参照した。

最終年度は、体育授業という教育実践の場に考察の対象を移した。前年度検討した身体の実存的な在り方の理解に基づき、それを体育教師の生きられた身体として再構成することを試みた。そこで重要となったのが、ヴァン・マーネンが論じている教育哲学（現象学的）の視点である（『生きられた経験の探求』）。彼の議論を検討する理由は、彼もまたメルロ＝ポンティをはじめとする現象学的議論に

注目し、そこから教育実践を捉え直すことの意義を論じているからである。既に述べたように、申請者はこれまでメルロ＝ポンティを中心に研究を進めてきたが、そこに教育的な視点、特に体育教師と児童・生徒との関係から成り立つ体育授業を捉えるための視点を加えるという意味においても、ヴァン・マーネンの議論を検討することは、本研究の課題遂行に大きく寄与すると考えられた。従って、当該年度の検討課題は、主に以下の2点であった。

第1に、体育授業を成立させる体育教師と児童・生徒との教育的関係の中で、体育教師が実存在的にどのような在り方をしているのかを検討した。これは、体育授業を生きられた世界（生活世界）として教育哲学（現象学的）に省みることによって明らかにされる事柄である。現象学によれば、生きられた世界はわれわれが知覚的に経験する世界であり、それはわれわれの実存に深く関わっている。例えば、知覚的経験の典型例である「奥行きは、いわば、あらゆる次元のなかで最も実存在的なもの」（メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』p.79）とされる。このような知覚的経験を成り立たせているのは、他でもない身体であり、従ってこの議論から、体育教師の身体の実存在的な在り方を検討した。その上で、第2に、児童・生徒との教育的関係の中に見出される体育教師の身体の実存在的な意味を明らかにしていった。前年度に検討した「怒り」等の実存在的な現象は、ここで体育教師の身体的行為として捉え直された。特に詳細に検討すべきは、この「怒り」等の体育教師の実存在的な身体的行為が、児童・生徒との関係において発現するという点である。なぜなら、上述の奥行知覚のように、体育教師の実存を担うのは個々の身体による知覚的経験なのであり、従って体育授業における体育教師の実存は、児童・生徒とともに生きることそのものにおいて、その意味を満たしていると考えられるからである。換言すれば、それは教育的関係の中で、知覚的経験を担う体育教師の身体によってなされていると想定される。体育教師自身に自覚されることのないこのような現象は、彼らが児童・生徒と身体的に実存在的な関係を作り上げ、それを生きることによって成り立っていると考えられる。本研究は、最終的にこの点に、体育教師の身体の実存在的な意味を見出すことができると考え、検討を進めた。

### 4. 研究成果

体育教師の身体文化や、その1つとしての指導言語は、体育教師の身体に担われている。そのような働きを有する体育教師の身体が、体育授業という世界をどのように生きていくのかを明らかにすること、すなわち、その実存の在り方を明示することが、本研究の課題であった。佐伯が述べるように、「実存を問題にするということは、フッサールのいう

『生活世界』(生きられる世界)を出発点とする思想の宿命のようなものである。その世界は、『身体 - 主体』としての実存によって住まれ、実存によって維持され展望性をあたえられるような世界」(佐伯『生活世界の現象学』p.183)なのである。

まず、教師の実存が顕著に現われる例として、燃え尽きという事象に着目した。教師の燃え尽きは、洋の東西を問わず、教師の実存的な危機として存在している。しかし、その問題の実存的な性格については、従来、必ずしも適切に捉えられてきたとは言えない。その原因の1つは、実証科学的に検証された指導技術に対する過度の信頼にある。つまり、実証科学的に追求された指導技術は誰にでもできる指導技術であることを目指し、それを実践する体育教師は誰でもよい状況をつくり出している。この誰でもよい状況は実存的危機を招き、それゆえそれは体育教師の実存という問題領域を提示する。

実証科学的に生み出された科学的なものは、われわれが実存の領域に目を向けることを、より一層困難にしている。フッサーはそれを「理念の衣」と呼び、それに隠された現象そのものを見ることの必要性を指摘する。つまり、体育授業という世界において、体育教師が身体として生きているという事象は、実証科学的に測定することはできず、むしろ現象学的な視点からそれを記述していくことが必要なのである。

体育教師の身体は、世界内存在として体育授業という世界に在る。ハイデガーによれば、世界内存在という在り方には、被投性と投企という2つの実存的な機能が本来的に属している。それらの機能は、不可避的に或る世界に投げ込まれている身体が、その世界に住まい、さらにはその世界を変容していこうとする、実存的な身体的行為として現れる。そのような体育教師の実存的な身体的行為は、例えば視線の移り変わりに見られる。困難な状況において体育教師の身体が担うその視線の移り変わりは、たしかに実証科学的に捉えれば、いかなる行動も起こしていないことになる。しかし、実存的なレベルにおいてそれは、体育教師の身体が、児童・生徒との関係を生きようとする身体的な行為として理解される。メルロ＝ポンティが指摘するように、そのような視線の動きは、単なる眼球の物理的運動ではなく、実存的な身体的行為なのである。

その行為によって、体育教師は身体のレベルで自らの実存を安定させている。そのような実存的な身体的行為を通して、体育教師は身体として、体育授業という生きられた世界に向かって投企し、そこに住み込んでいる。このことは、その関係が正常に機能していない状況、すなわち、体育教師に対する児童・生徒の無視という事象に顕著に現われる。なぜなら、そのような実存的な危機のときにこそ、世界内存在としての体育教師の身体は、

その世界に住み込み、そこにおいて関係を築こうと懸命に努力するからである。そしてそこに現れているのは、体育教師の身体の根源的な働きである。

そのような体育教師の実存は、指導言語を児童・生徒に届けるという、体育教師にとって最も日常的な事象にも見られる。体育授業において、体育教師は自らの発する指導言語を児童・生徒に届ける。その指導言語は、体育授業という特殊な状況とその豊かな空間性において、特にその奥行の経験によって、体育教師の実存を安定させる。ドレイファスが指摘するように、ディスプレイやスクリーンを通じた体育授業では、指導言語を届け、根源的な生きられた関係を築くことはできない(ドレイファス,2002)。つまり、体育授業における奥行の経験こそが、体育教師の実存を安定させる本質的な役割を担っているのである。具体的な授業場面に目を向ければわかるように、体育授業において児童・生徒は、授業開始時の整列の状態から、広がったり、動き回ったり、再度集合したり、時には座りながら、時には気をつけの姿勢で、また時には動きながら、体育教師の指導言語を受け取っている。視点を体育教師に移せば、そのような目まぐるしい状況のなかで、体育教師は1人ひとり、もしくは集団としての児童・生徒に指導言語を届けている。その指導言語を発し、届けるという身体的行為は、物理的距離を超えて、まさに実存的なレベルにおいて、体育教師の実存を無意識のうちに充実させ、安定させている。なぜなら、そのような多様な状況における体育教師の指導言語の発話は、ダイナミックな知覚的経験とそれに伴う豊かな実存的経験を可能とするからである。そして、その指導言語が身体的所作であるがゆえに、そのような経験は体育教師の身体に担われているのである。

このような指導言語の実存性は、体育教師の「怒り」の発現として児童・生徒を叱るという事象にも、顕著に現われる。メルロ＝ポンティによれば、われわれは「怒り」を、他者の内面的な心情として想像しているわけではなく、むしろ、それを表情や所作に直接的に見とり、その意味を了解している。体育教師の「怒り」は実存的なレベルにおける体育教師の身体表現なのであり、それゆえ、それを児童・生徒が知覚的に経験し、了解することは、実存的な交流としての意味をもつのである。

もちろん、体罰などに見られるように、体育教師の「怒り」の発現は必ずしも肯定されるわけではない。しかし重要なことは、倫理道徳的な問題の根底に、このような実存的な問題が潜んでいるという事実である。つまり、体罰を肯定する児童・生徒が存在し続けているという現状を適切に理解するためには、体罰の倫理道徳的な問題性を指摘するだけでは不十分なのであり、むしろその現状は、実存的な交流を通じて或る意味が作り出さ

れることによって支えられていると考えられる。体育教師の身体は、その「怒り」の表現によっても、自らの実存を、児童・生徒との関係において安定させることができるのである。

従来、このような体育教師の実存的な側面に目が向けられてきたとは言えないだろう。そのような現状に対して、本研究の議論とそこから導かれた以上の知見は、体育教師を目指す学生のみならず、今この瞬間にも体育授業に立ち、燃え尽きや無視といった困難を抱えている体育教師に、彼らの実存的な意味の在り処を提示する。要するに、体育教師の身体という視点は、現実の体育授業において体育教師が児童・生徒の前に立ち、彼らとともに生きていることそのものを肯定し、その意味を見出すことを可能とするのである。

## 5．主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計1件)

SAKAMOTO, Takuya, The Body of the Sports Coach as Site of Existential Meaning, 42nd conference of the International Association for the Philosophy of Sport、査読有、平成26年9月、ブラジル

〔その他〕

坂本拓弥、第6章：身体として生きる体育教師の実存、身体としての体育教師：メルロ＝ポンティの身体論に基づく体育教師論再考所収、東京学芸大学博士学位論文、平成28年3月

## 6．研究組織

(1)研究代表者

坂本 拓弥 (SAKAMOTO, Takuya)

明星大学・教育学部・助教

研究者番号：30734298